

研究に聞く
歴史地理学の
自由な探究

文学部・川名禎准教授

あれも歴史地理学、これも歴史地理学。川名禎・文学部史学科准教授のインタビュからは、歴史地理学の学問としての幅の広さ、そして楽しさが伝わってくる。若かりし頃、多くの人が頭を悩ませたかもしれない、暗記科目としての地理の苦しさは、そこにはない。とはいえ、そもそも歴史地理学って何？基本中の基本から川名准教授にじっくり話を聞いてみようとしたところ、予想外のトピックスを皮切りに、その世界は幕を開けた。そう、私たちが幼少期から経験してきたあの環境も、歴史地理学の範ちゅうなのかもしれない。

5面に続く

令和7年度オープンキャンパス

3日間で過去最多の2万人以上が来場



8月2日、3日と23日の3日間にわたり、渋谷とたまプラーザの両キャンパスで「OPEN CAMPUS 2025」を開催した。今年度の総来場者数は過去最多を記録し、両キャンパス合わせて2万人を超える高校生や保護者らが訪れた。

猛暑が続くなか、それぞれのキャンパスには朝から大勢が来場。各学部学科の教員によるガイダンスや模擬授業では熱心に耳を傾けた。また、個別相談ブースでは、入試制度や入学後の学生生活について教職員へ質問する姿も見受けられた。

学生たちによるトークショーやキャンパスツアーも実施され、学生たちは授業の様子や大学生活を紹介。受験生に向けて「またこのキャンパスで会えることを楽しみにしている。大学生活をイメージしながら受験勉強も頑張ってください」とエールを送る場面も見られた。3日間を通じて教職員や学生が本学の学びや学部の魅力を伝えた。

全国各地で発生した大規模災害で被災された皆さまへ

カムチャツカ半島付近の地震に伴う津波のほか、自然災害により被災された皆さまに衷心よりお見舞い申し上げます。被災された学生やそのご家族の皆さまを

はじめ、被災地の皆さまの生活が一日も早く平常に復するよう、心よりお祈り申し上げます。

令和7年9月20日 国学院大学

みはるかすもの

「Is this SHIBUYA CROSSING?」。信号待ちをしているスクランブル交差点で、スマートフォンに表示された交差点の写真と共に、外国人観光客の中年男性に声をかけられた。そうだと答えると、「ありがとう、ここで人と待ち合わせをしているんだ」と男性。人ごみのなか、うまく出会えるよう祈りつつ、彼と別れた

YATSUTAYAは、コアな映画ファンの聖地だった。DVDさえ出していない名画の廃盤VHSが取り揃えてあり、ミニシアター文化と共鳴していた▼昭和期に考現学という学問的態度を提唱し、その一環で東京の街をゆく人々の服装などを生き生きとスケッチしたのは、今和次郎だ。次々と移りゆく街の様相は、誰かが記憶し、記録しておかねば振り返ることはかなわない▼歩行者用の信号が青になった瞬間、スマートフォンで映像を撮りながらスクランブル交差点の中心へ駆けだしていく観光客の姿は、ごく当たり前のように見受けられるようになった。もちろんさまざまな意見はあるだろうが、今しか見られない景色のひとつかもしれない。再開の展開も含め、本学に籍を置く者として日々目の当たりにできるものを大切にしていきたい。

佐田岬半島ミュージアムとの相互連携協定を締結



国学院大学（学長・針本正行）と佐田岬半島ミュージアム（館長・高嶋賢二）は、7月28日に歴史・民俗的財産を有効に活用した協働による活動を推進し、地域社会の発展及び市民サービス、教育・研究と人材育成の向上に資することを目的として、相互連携及び協力に関する基本協定を締結した。締結式は同日に佐田岬半島ミュージアムで行われ、針本学長、高嶋館長をはじめ、双方の関係者が出席した。

◆連携・協力事項▷博物館における資料保存に関する事項▷博物館における資料活用に関する事項▷人材育成に関する事項（博物館実習等）▷学際的研究及び教職員等の人的交流に関する事項▷その他、知見や知的財産等を生かし、連携及び協力することができる事項

法人幼稚園説明会

就職希望の学生らが参加



学校法人国学院大学の系列園である国学院大学附属幼稚園および国学院幼稚園による就職説明会が7月11日、たまプラーザキャンパスで開催された。この説明会は、人間開発学部子ども支援学科および初等教育学科の学生のうち、私立幼稚園への就職を希望する学生を対象に実施された。

当日は、各園の園長から教育方針や保育現場の魅力を紹介されたほか、たまプラーザ事務課の職員が同学部と連携した手厚い就職支援体制について説明した。院友（本学卒業生）の教諭らが、園での1日の流れや園児との印象的なエピソードを語ると、参加した学生たちはメモを取りながら、真剣な表情で耳を傾けていた。

公開研究会『日本書紀』について学ぶ

研究開発推進機構研究開発推進センターによる公開研究会「中近世における『カミ』テキストを巡る学知」が、7月31日に渋谷キャンパス学術メディアセンターで開催され、オンライン参加を含め約60人が参加した。

冒頭、笹生衛・同機構長（神道文化学部教授）があいさつし、続いて松本久史・研究開発推進センター長（同教授）が趣旨説明を行った。

講演では伊藤聡氏（茨城大学教授）が『中世日本紀』と『日本書紀』註釈、松本丘氏（皇学館大学教授）が「近世における神祇・神道の古典をめぐる学知—『日本書紀』と垂加神道—」と題し、報告を行った。

講演後は登壇者と渡邊卓・研究開発推進機構准教授、松本センター長とで『日本書紀』をはじめとするさまざまな「カミ」テキストの生成や解釈に関する研究の可能性について議論が行われた。

国際招聘研究員 研究成果を発表

国学院大学国際招聘研究員として研究を行っていたカルピンテリ・マリアンジェラ氏の研究成果発表会が7月24日、渋谷キャンパスで開催された。

カリフォルニア大学サンタバーバラ校（米国）博士候補生のカルピンテリ氏が国際招聘研究員としての研究期間を終了するにあたり「穢れを清める儀式である大祓の歴史的発展」と題して、研究発表を行い、「思想」と「儀式」の二つの視点から論じた。発表後は、参加者から数多くの意見や質問が寄せられた。

第50回日本文化を知る講座

研究開発推進機構が主催する「日本文化を知る講座」が7月12日、渋谷キャンパス常磐松ホールで開催されたII写真。

現在、改組を経て同機構下にある日本文化研究所は、昭和30（1955）年に創設されており、令和7年で70周年を迎える。この節目の年に「日本文化を知る講座」も50回を数え、これらを記念して「国学院大学の日本文化研究の歩み」と題して同機構所属の専任教員5人が講演を行った。当日は学生や研究者ら90人以上が聴講した。



冒頭、笹生衛・同機構長（神道文化学部教授）が「日本文化研究所は歴史、文学、宗教、神道、民俗学などを総合的に研究してきた。創立70周年の節目にその歩みを振り返り、改めて研究開発推進機構として継承してきた研究を見つめ直して大型研究プロジェクト『カミ学』に生かしていきたい」とあいさつした。続いて星野靖二・日本文化研究所所長（研究開発推進機構教授）が講演。改組前の旧日本文化研究所から続く沿革や研究事業、特に設立当初から一貫して行ってきた「日本文化研究」の国際発信について、国際シンポジウムや「神道事典」の英訳などの事例を挙げながら詳述した。

続いて、個別の研究分野に関して、研究開発推進機構の宮本晋士教授が「国学院大学の日本文化研究における『国学研究』、渡邊卓准教授が「国学院大学の日本文化研究における古典研究の位置」、大東敬明教授が「国学院大学の日本文化研究における神道研究」、神道史学者とその資料、深澤太郎教授が「考古学研究と関連諸学―国大ルネサンスを目指して―」と題して講演を行った。

公開古典講座

『源氏物語』と『万葉集』を取り上げ開催



令和7年度公開古典講座が、7月22日から26日にかけて渋谷キャンパス常磐松ホールで行われた。

この講座は昭和初期に開講した「萬葉講座」の流れを受け継いだ短期講座で、例年、『源氏物語』と『万葉集』を取り上げている。

今年度の『源氏物語』の講座は、「桐壺巻を読む」と題し、初日は小田勝・文学部教授が「光源氏の誕生と桐壺更衣の死①・②」の講義を担当。登場人物の相関図を示しながら、光源氏の誕生から成長までが描かれた「桐壺」巻の本文を文法の観点から読み解いた。随所にユーモアを交えた解説に、会場内は度々笑いに包まれた。

『万葉集』の講座は、「巻十六を読む」として初日は「巻十六の歌物語／物語歌①・②」と題し、土佐秀里・同教授が講義を行ったII写真。

はじめに「歌と物語には深い関係があるが、時代とともにその関係性は忘れられがちである」と語り、「万葉集」巻十六に収められた物語と、それに関連する歌の内容について詳しく紹介し、物語にこめられた思いや、豊かな表現方法について解説した。同教授の軽妙な語り口に、終始和やかな雰囲気の中で講座が進行した。

同講座は9月17日から11月30日の期間でオンデマンド配信が行われる（有料。詳細は本学HPを参照）。



植物を通じて万葉集に親しみ、万葉集を通して日本の自然や文化を理解することを目的に、年に1度実施している公開講座「萬葉の花の会」が9月4日、たまプラーザキャンパスで開催された。

午前の部では、辰巳正明・同会会長（名誉教授）と渡邊卓・研究開発推進機構准教授が「『万葉集正義』とは何か」をテーマに対談を行ったII写真。『万葉集正義』は辰巳会長を中心に編纂されている『万葉集』の注釈書で、本学の創立140周年記念事業として、これまでに2巻（全10巻予定）が刊行されている。学統を継承しつつ、新たな『万葉集』注釈書を編さんした意義について、辰巳会長は「それぞれの国の文学研究が集まることで世界文学研究の第一歩が完成する。そのためには自国の作品を一つ一つ根拠をもって解釈すること、すなわち『正義』が必要である」と語った。その後、大石泰夫・文学部教授が「熟田津に船乗りせむと」、午後の部では、上野誠・同教授（特別専任）が「手向けの古代学」と題してそれぞれ講演を行った。

お昼の時間には、『万葉集』に登場する食材を使用したお弁当を堪能したり、『万葉集』の歌に詠まれた草花を植栽する「万葉の小径」の散策を行ったりするなど、参加者の多くが万葉集の世界観を満喫していた。

第31回「萬葉の花の会」を開催

植物を通じて万葉集に親しみ、万葉集を通して日本の自然や文化を理解することを目的に、年に1度実施している公開講座「萬葉の花の会」が9月4日、たまプラーザキャンパスで開催された。

午前の部では、辰巳正明・同会会長（名誉教授）と渡邊卓・研究開発推進機構准教授が「『万葉集正義』とは何か」をテーマに対談を行ったII写真。『万葉集正義』は辰巳会長を中心に編纂されている『万葉集』の注釈書で、本学の創立140周年記念事業として、これまでに2巻（全10巻予定）が刊行されている。学統を継承しつつ、新たな『万葉集』注釈書を編さんした意義について、辰巳会長は「それぞれの国の文学研究が集まることで世界文学研究の第一歩が完成する。そのためには自国の作品を一つ一つ根拠をもって解釈すること、すなわち『正義』が必要である」と語った。その後、大石泰夫・文学部教授が「熟田津に船乗りせむと」、午後の部では、上野誠・同教授（特別専任）が「手向けの古代学」と題してそれぞれ講演を行った。

人間開発学部

◆助手

大門千紗（だいもん・ちさ）

①日本大学大学院文学研究科教育学専攻博士前期課程修了。

②伝統ある国学院大学に入職できたことを大変光栄に思います。専門はスポーツ心理学で、特にチームワークに関する研究を行っています。学生みなさんが楽しく、かつ意欲的に学修に取り組める環境づくりに尽力してまいります。（令和7年8月1日付）



大学事務局

◆教学事務部教務課書記

白井優希（しらい・ゆうき）

①法政大学を卒業後、共同印刷株式会社、学校法人横浜商科大学での勤務を



新任専任教職員紹介

- ①略歴
- ②抱負

経て現職。

②歴史と伝統ある国学院大学の職員として従事できることを大変うれしく思います。前職の大学職員としての経験を最大限生かし、一日でも早く本学に貢献できるよう精進してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

◆学生事務部学生生活課書記

菊入混平（きくいり・こうへい）

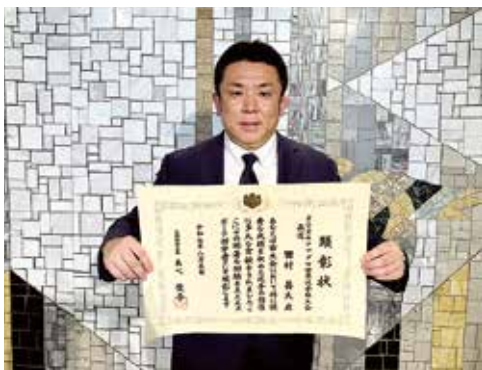
①国学院大学経済学部を卒業後、日本製鉄株式会社での勤務を経て現職。

②この度、母校である国学院大学に職員として戻り、働けることを大変うれしく思います。皆様とのご縁を大切に、前職での経験を生かし、本学の発展に少しでも貢献できるよう精いっぱい努めて参ります。

（令和7年7月1日付）



田村准教授、川上柔道部コーチが文部科学大臣表彰を受賞



文部科学省は「スポーツ功労者顕彰」「スポーツ功労団体表彰」「国際競技大会優秀者等表彰」の受賞者を発表し、令和6年度の国際大会において優れた指導実績が認められた人間開発学部健康体育学科の田村昌大准教授（＝写真）と、柔道部の川上智弘コーチが表彰された。

この表彰は、各種スポーツの国際競技大会において活躍した選手とその指導者・関係者をたたえるもので、表彰式は8月5日、ホテルニューオータニ「芙蓉の間」（東京都千代田区）で行われた。

田村准教授は、令和6（2024）年に開催された世界選手権大会（アラブ首長国連邦・アブダビ）で女子日本代表のコーチを、川上コーチは、同年に開催された世界ジュニア選手権大会（タジキスタン・ドゥシャンベ）で男子ジュニア日本代表のコーチをそれぞれ務め、選手たちの活躍を支えた。

両名の表彰は、世界に挑む選手たちへの的確な指導とサポートが高く評価されたものであり、本学の指導陣による育成力の高さを改めて示すものとなった。

小林達雄名誉教授 逝去

国学院大学名誉教授の小林達雄氏が8月22日に逝去。87歳。葬儀は近親者により執り行われた。

小林氏は昭和12年生まれ。36年国学院大学文学部史学科卒業、38年同大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了、41年同博士課程単位取得退学、43年10月ウィスコンシン州立大学人類学部留学。その後、45年東京都教育委員会文化課技師、51年文化庁文化財調査官などを経て、53年国学院大学文学部助教授、60年教授に就任。平成20年3月定年により退職。令和5年米国芸術科学アカデミー会員に選出。

専門は考古学。著書に『縄文土器の研究』（小学館）、『縄文人の世界』（朝日新聞出版）などがある。

花堂靖仁名誉教授 逝去

国学院大学名誉教授の花堂靖仁氏が7月11日に逝去。83歳。葬儀は家族葬により執り行われた。

花堂氏は昭和16年生まれ。39年早稲田大学第一商学部卒業、42年同大学院商学研究科修士課程修了、45年同博士課程単位取得退学。同年10月国学院大学経済学部兼任講師、46年専任講師、49年助教授、55年教授、平成15年3月自己都合により退職。同年4月から24年3月にかけて同大学院経済学研究科兼任講師を務めた。

専門は会計学。編著書に『近未来の企業経営の諸相－2025年－』（中央経済社）、『XBRLの衝撃－日欧米40数カ国550余機関が推し進める世界標準』（ダイヤモンド社）などがある。

宮下大志・法学部准教授 逝去

国学院大学法学部准教授の宮下大志氏が8月11日に逝去。66歳。葬儀は本人のご遺志により執り行わない。

宮下氏は昭和33年生まれ。57年東京大学法学部卒業、59年同大学院法学政治学研究科政治専門課程修了、63年同博士課程単位取得退学。同年4月国学院大学法学部専任講師、平成3年助教授、19年准教授。

専門は政治学。編著書に『戦後デモクラシーの成立』（岩波書店）などがある。

観光まちづくり演習Ⅲ

学生たちが地域住民にむけ課題解決策を提案



この演習では、学生たちが具体的なテーマや調査の対象地域ごとに「スタジオ」と呼ばれるグループに分かれ、観光による地域課題の解決を目指す「観光まちづくり」の構想をチームで立案、発表を行っている。今回発表を行った松本貴文・同学部准教授らが担当する相模原スタジオの学生たちは4月から現地に足を運びながら各自でテーマを設定し、教員や地域関係者の助言を受けながら提案をまとめた。

報告会当日は、地域住民や自治体職員に向けて「甲州道中・小原宿の歴史・文化を生かした観光まちづくり」「藤野の自然・文化・産業を生かした持続可能な観光まちづくり」「道志川沿い周辺のキャンプ場と地域の連携を深める観光まちづくり」の三つのテーマに対してそれぞれ4チームが提案を行い、自然や地域の名産品、交通の特性などを生かした具体的な施策が発表された。

報告会に参加した自治体職員からは「行政ではなかなか出てこない視点の提案だった。今後前向きに導入を検討したい」と感想が述べられ、発表を終えた学生は「調査を通してこれまで気がついていなかった地域の魅力を発見できた。今後も継続的に関わっていき」と振り返った。

観光まちづくり学部の3年次前期必修科目「観光まちづくり演習Ⅲ」の一環として、「相模原スタジオ」の現地報告会が7月19日、津久井生涯学習センター（相模原市）で開催された。写真。



国際交流送別会が7月25日、渋谷キャンパス有栖川宮記念ホールで開催され、学生や教職員、フレンドシップファミリーなどが留学期間を終え帰国する学部・大学院交換留学生やKISTEP交換留学生ら約20人を送別した。

はじめに仙北谷穂高・大学事務局長から一人一人に修了証を手渡されると、留学生たちは笑顔で修了証を受け取り、「国学院大学で日本文化を学び、出会った学生たちの優しさに触れたことで、世界の捉え方が変わった」と振り返りながら日本語であいさつした。

最後は、代表留学生のかけ声による三本締めで送別会が締めくくられた。

国際交流送別会が7月25日、渋谷キャンパス有栖川宮記念ホールで開催され、学生や教職員、フレンドシップファミリーなどが留学期間を終え帰国する学部・大学院交換留学生やKISTEP交換留学生ら約20人を送別した。

はじめに仙北谷穂高・大学事務局長から一人一人に修了証を手渡されると、留学生たちは笑顔で修了証を受け取り、「国学院大学で日本文化を学び、出会った学生たちの優しさに触れたことで、世界の捉え方が変わった」と振り返りながら日本語であいさつした。

最後は、代表留学生のかけ声による三本締めで送別会が締めくくられた。

第16回教育実践フォーラム

探究的な学びを実現するICTの活用を



国学院大学人間開発学部教育実践総合センター主催による夏季教育講座「教育実践フォーラム」が7月27日、たまプラーザキャンパスで開催された。「主体的に学び合う子どもの育成―探究的な学びを―」をテーマにした現役教員・保育者による事例発表や、本学教員・学生を交えた活発な討議、意見交換が行われた。

続いて令和5年度まで同学部教授を務めた田村学・文部科学省初等中等教育局主任視学官が「探究的な学びを実現する授業・活動のデザイン―学習指導要領の改訂を視野に入れて―」と題して基調講演を行った。写真。田村氏は中央教育審議会が進んでいる次期学習指導要領の策定作業について、探究的な学びと情報活用能力の一体化がキーワードになると説明。「情報活用能力の育成を目的に探究活動をするのでは本末転倒。探究の充実のためにICT（情報通信技術）を使っていくべきだという方向性が議論の中でも示されている」と強調した。

その後、参加者は「保育・幼児教育」「言葉・国語」など八つの分科会で対話と交流を深めた。「道徳」の分科会では生成AIを授業で活用する方法などに関するワークショップが行われ、参加者は新鮮な体験を味わった様子だった。

16回目をむかえた今回は過去最多の600人を超える参加申し込みがあった。開会あいさつに立った太田直之・同学部長（教授）は「人間開発学部は今年で創設17年目となる。開設当初から研究成果による地域への貢献、社会還元を大きなテーマにしてきた。本フォーラムで得た知見を現場に持ち帰り、生かしてほしい」とあいさつした。

続いて令和5年度まで同学部教授を務めた田村学・文部科学省初等中等教育局主任視学官が「探究的な学びを実現する授業・活動のデザイン―学習指導要領の改訂を視野に入れて―」と題して基調講演を行った。写真。田村氏は中央教育審議会が進んでいる次期学習指導要領の策定作業について、探究的な学びと情報活用能力の一体化がキーワードになると説明。「情報活用能力の育成を目的に探究活動をするのでは本末転倒。探究の充実のためにICT（情報通信技術）を使っていくべきだという方向性が議論の中でも示されている」と強調した。

博物館特別展

「アイヌモシリアイヌの世界と多様な文化―」
講座と体験で理解を深める



31日にはアイヌの文様を刺しゅうで刺すワークショップ「刺しゅう体験」が2回開催され、参加者はチェーンステッチという技法での刺しゅうに挑戦した。

■ミュージアムトーク
国学院大学博物館で6月28日から9月23日の期間で開催されている特別展「アイヌモシリアイヌの世界と多様な文化―」のミュージアムトークが8月2日に行われ、内川隆志・同副館長（文学部教授）が「松浦武四郎と北海道」をテーマに講演Ⅱ写真上。展示品や映像を用いてアイヌ文化を紹介し、探検家の松浦武四郎による地誌に描かれたアイヌの人々の風習などについて、今後民俗学的視点からの再評価が重要と語った。

■関連イベント
7月20日、同博物館で特別展開連イベント「ムックリ演奏体験」が、アイヌ文化交流センターの木原仁美氏と、ウポポイ（民族共生象徴空間）職員でムックリ演奏家の川上さやか氏らを迎えて行われた。参加者は竹製の伝統楽器ムックリの演奏を体験した。川上氏から「自然の音を感じて奏でることが大切」とアドバイスを受け、参加者たちは音の出し方や表現の自由に触れていた。

8月30日には「アイヌ文様を描いてみよう」のイベントが開催された。参加者たちはペンやクレヨンを使って「モレウ（渦巻き文）」や「アイウシ（棘・括弧文）」といった基本の文様を組み合わせたアイヌの文様をトートバッグにうつし、描くことに挑戦したⅡ同下。

たまプラーザ宇宙の学校2025

子どもたちに自然科学の学びを提供



「たまプラーザ宇宙の学校2025」の第3回スクーリングが7月19日に開催された。宇宙の学校は人間開発学部の学部活性化事業「人間開発・花咲くプログラム」のひとつとして、小学校低学年の児童とその保護者を対象に毎年行われている。全3回で構成されており、運営はすべて学生が担当した。

当日は、「マグナス効果」を応用した紙コップ飛行機作りや、子どもたちが家庭で保護者と一緒に挑戦した実験や工作、観察の結果を発表する「レポート発表」が行われた＝写真。

閉校式では、近藤良彦校長（同学部教授）から子どもたちへ修了証が手渡された。運営に携わった学生は「模擬授業の計画経験などを生かし、子ども目線でのサポートや運営に関わることができたと思う」と振り返った。

夏のわくわくトレジャーハント

学生スタッフ主導で企画運営



地域ヘルスプロモーションセンターが主催する「夏のわくわくトレジャーハント2025」が7月19日、たまプラーザキャンパスで開催され、近隣に住む小学生とその保護者ら約60人が参加した＝写真。

同センターでは毎年子どもたちが身体を動かす参加型イベントを企画。今回は支援学生の会「ちーへる」に所属する学生ら約45人が担当して、当日は三つの運動メニューを実施した。年齢や体力の違いによる影響を少なくするために学生たちが工夫を凝らした。

運動メニューを企画した学生は、「誰もが遊んだことがあるようなレクリエーションを子どもたち向けにアレンジした。今日の様子を見て、身体活動の確保という開催目的は半分ほど達成できたが、まだ改善できる点もある」と語った。

4年生を対象に求人フェアを開催

就職活動中の大学4年生を支援する「求人フェア」が7月16日、渋谷キャンパスで開催され、約50人の学生が参加した。

求人フェアは、優良企業の求人情報と新卒応援ハローワークや就職ナビサイトの専門スタッフによる個別相談を通して、自分に合う仕事探しができる催し。会場では、業界・職種ごとに求人情報が掲示され、参加した学生は熱心に目を通していった。個別面談では、就職活動の悩みを専門スタッフへ真剣に相談する姿がみられた。

キャリアサポート課では、就職活動中の4年生への支援を続けており、10月8日(水)には合同企業説明会を予定している。

ボランティアフェアを開催

教育開発推進機構ボランティアステーションが主催するボランティアフェアが7月8日、渋谷キャンパスで開催された。

本学のボランティアステーションに登録するNPO法人などがブース形式で出展し、約80人の学生が参加した。参加した学生たちは、複数のブースを巡り、活動内容などについて積極的に質問した。

ある4年生は、「残りの大学生活の中で時間を有意義に使いたいと思い参加した。さまざまなジャンルのボランティアがあることを知り、ぜひ参加してみたい」と語った。



幸田成友

経済史の講筵

学問ノ道

第70回

国学院大学における講義科目「経済史」の開講は、昭和4（1929）年の学部学則の変更時にその初見を認められる。ただし、実際の開講は6年後の昭和10年のことで、このとき「日本経済史」を担当したのは日本近世都市経済史・日欧通交史研究者の幸田成友（兄に小説家の幸田露伴をもつ）であった。幸田が昭和17年に辞すと、その後20年までは、前近代の神社や水産にかかわる産業経済史・民俗研究で知られる祝宮静が教鞭を執った。アジア・太平洋戦争の終結後、新制大学となった当初は文学部の科目として「経済史」が設置され、ドイツ中世都市史研究の増田四郎が教壇に立つこととなる。のち政経学部改組（昭和25年）により、増田は経済学科の「西洋経済史」と政治学科の「経済史」とを兼任し、経済学科の「日本経済史」は前近代日本の法制史を主な専門とした瀧川政次郎が受け持った。

その後、昭和41年の経済学部開設にあたり、西洋中世商業史研究の伊藤栄が「西洋経済史」を、また日本経済思想史の塚谷博通（晃弘）が「日本経済史」を講じている。さらに昭和43年には、日本中世・近世の社会史・経済史研究の大家であった中村吉治が教授として迎えられて「経済史」の開講をみた。

このように国学院大学の経済史は、経済学関連の授業でありながら、その教壇には歴史学を専門とした人物たちが立ち続けてきた。では経済史を歴史研究者が講じる状況とは、一般的なことなのだろうか、また明治以来の本邦近代歴史学発展の歴史に対し、経済史の独立科目としての設置が昭和初年である点は、その立ち上がりとして遅い印象である。

しかしながら、理財科を備えた慶応義塾大学でさえ、義塾で学んだ野村兼太郎が本邦西洋経済学の最初の成果にして、経済史を「研究」のレベルにまでに引き上げたこととされる『英国資本主義の成立過程』を上梓したのは、昭和12年のことであった。また、東京商科大学（現一橋大学）においては経済学の理論・政策・歴史の諸方面に福田徳三が著名だが、学問としての経済史の体系化は教え子の上田貞次郎により成し遂げられた。上田が『英国産業革命史論』で、イギリス産業革命の総合的な理解の方法を提示したのは、大正12（1923）年のことである。なお、帝国大学での経済史の講座化は、東京帝大では大正8年、京都帝大でも大正11年のことであった。

1920年代当時の本邦経済史研究は、歴史学のなかでも流通経済史に関心をもった人物たちを担い手とし、いまだその学問的確立の過渡期にあった。おのずから各大学においても、その講筵を受け持ったのは同系譜に位置する人びとであり、国学院大学にみた状況もその一斑なのであった。

しかし、これは見方を変えらると、国学院大学では新たな学問分野の芽生えという学術研究界の動向を的確に捉え、適材をもってそれを教育の現場へと導入する、きわめて柔軟かつ最新の研究・教育活動が実践されていたことを示すものといえよう。

研究開発推進機構助教（特別専任）比企貴之

— 前編 —

地図的な思考は、 仮説を生み出す源泉となる

文学部・川名禎准教授

研究 者 に 聞 く



かわな・ただし

博士(歴史学)。専門は近世城下町の歴史地理学。近年では災害研究から祭祀研究まで幅広いテーマで研究を行う。本学での兼任講師を経て、令和5(2023)年より現職。主な研究に、『「城下町」用語とその概念の変遷』(『國學院雑誌』119巻3号)、『分散城下町の成立とその統合原理』(『歴史地理学』50巻5号)などがある。

全編はこちらから



後編



前編

身近にある「空間」が学問の対象となる地理学

「皆さんは、どういう意思によって、その座席に座ったんですか」授業の教室で、めいめいに座る学生たちを前に、このように問いかけることがあります。

地理学は「空間」の学問だとよくいわれるのですが、それはたとえば、ある現象がどのような距離感のもとに分布しているのか、その背景にあるものは何なのか、といったことを問うことを意味します。であれば、教室で学生たちが座っている場所も、地理学で論じる対象になりうるわけです。

こうした学生たちの座席の位置は、地理学で扱ういくつかの重要な概念のうち、「地域」にも大きく結

びついてきます。一般的な使い方としては、中央に対する地方といった文脈で使用されることが多いのですが、地理学においては何らかの意味合いにおいてまとまった空間のことを「地域」と呼びます。ひとつの教室のなかの学生たちであれば、その授業を履修しているという点で、ひとつの意味のまとまりがありますよね。つまり、その教室は「地域」とみなしうるのです。

ただ難しいのは、地域というのは必ずしも明確な境界をもたないケースもある、ということですが、教室であれば、隣の教室というもうひとつの地域と授業の音が混ざ

りあってしまっただけで困りますから、壁を設けて、それぞれの教室に名前をつけて区別していますよね。しかし世の中を見渡してみれば、こうした明瞭な区分にもとづいた地域ばかりとは限らない。

たとえば、東京多摩地域であるとか、武蔵野といったときには、そのようにハッキリとした壁がないわけですから、どこからどこまでが多摩地域なのか、武蔵野なのかといった議論が巻き起こることが度々ある。湘南であるとか、関西にしても同様ですね。だからこそ、地理学として探究する面白さもあることでしょう。

もうひとつ、地理学としての重

ふと生まれる気づきを研究に生かす

さて、そのうえで、私が専門としているのは歴史地理学です。これはやや細かい話にはなりますが、ひとまず日本の歴史地理学に話を限ってみると、明治時代に歴史地理学を成立させていった人々は、基本的には日本史研究者、つまりは歴史学者でした。このことが、現在に至るまでの日本の歴史地理学の、大きな流れを形づくっています。

あくまでザックリとしたイメージとして捉えていただければ幸いなのですが、日本の歴史研究者のなかに、NHKで放送されてきた人気番組『プラタモリ』のような感性をもつ、地理好きの人間が多かったと思うかもしれません。

うすこしさかのばれば、江戸後期に盛んに編まれた地誌は、各地域のことをいろいろと調べ、自然のありようからその土地で行われた

戦、寺社の宝物などをまとめているという意味において、歴史地理学のひとつの源流として見ることもできるでしょう。こうした流れを引き継ぎつつ、明治32(1899)年に日本歴史地理研究会が設立されたのです。

歴史を考えると、何かしらについて議論を深めていくというとき、地理学的な発想を用いると、どういった視界が開けてくるのでしょうか。それについてお話しするうえで、「地図的な思考」というものを、地理学的な考え方のひとつとして挙げながら説明してみたいと思います。

たとえば皆さんも、世界地図を眺めたことがあるのではないのでしょうか。南アメリカ大陸の東側の海岸線と、アフリカ大陸の西側の海岸線を近づけると、ピッタリとくっつくのではないかと……20世紀

初頭にそう考え、「大陸移動説」を唱えたのが、ドイツの気象学者アルフレッド・ウエゲナーでした。

大陸をまたいでアマゾン川とニジェール川も、あるいは山脈同士もつながるのではないかと、いろいろと状況証拠を提示したわけですが、なぜ大陸が移動したのか、根本的な原理を説明できず、大陸移動説は否定されることになりました。

1960年代以降にプレートテクトニクス理論が提唱されることで、ウエゲナーの大陸移動という発想は、ようやく再評価されることとなりました。

このように、「地図的な思考」というものは、ある意味では理論に先んじて仮説を発想できることがあるのではないかと、私は感じています。まだ証明されていないことであっても、地図を眺めているうちに、「……ん？」と気づくこ

要な概念として、「景観」が挙げられます。これは目に見える風景を漫然と指すものではなくて、そこに存在しているものが——たとえば里山でしたら、木々や草花といった植生ですとか、家々や田畑、橋や道路などが——ひとつのまとまりをもっているときに「景観」という表現を用います。

このように地理学には基本となる概念がさまざまありますが、いずれにしても実は、私たちにとても非常に身近な対象をも扱っている学問であるということが、わかりただけかと思えます。

とがある。他にもたとえばイギリスでは、大気汚染が広がる地域ほど肺がん患者が多いという相関性について地理学者が言及するも、医師界からはエビデンスがないとして受け入れられず、近年ようやく再評価されつつあるという例もあります。

私自身、本学の史学科の出身であり、歴史学にも並々ならぬ思い入れがあります。だからこそ、歴史学だけではなくなかなか捉えきれない、地図的な思考も含めた地理学の知見をうまく取り入れることで、歴史をめぐる学究に何か貢献できることはないだろうかとか模索を続けているところです。インタビュー後編では、こうした歴史地理学がもつ面白さや自由さについて、より詳しくお話ししていきます。

国学院大学メディア

「人間の学が知の乾きを潤す」
国学院大学が蓄積し醸成してきた知恵を
多彩なスタイルでご紹介します。



インフォダイジェスト

 …在学生
  …保証人
  …卒業生
  …一般
  …受験生
 内容
  日にち
  時間
  場所
  対象
  定員
  料金
  申し込み
  問い合わせ

大学からのお知らせ

第9回「渋谷区長への施策提言コンペ」の参加者を募集します



内 本学では渋谷区と連携し、学生ならではの施策提言を行っています。9回目となる今回のテーマは「国学院大学生が考える渋谷区の課題と、それを解決するための施策」です。発表では学生の皆さんから直接、長谷部健区長へ提言を行い、ご意見をいただきます。応募方法詳細は本学HP（**二次元コード**）でご確認ください。



【発表】 10月29日(水)13時～16時30分
 一次選考を通過した個人・団体によるにパワーポイントを用いた10分間のプレゼンテーションを実施。

【表彰】 区長賞、学長賞（各賞金5万円）、その他副賞

イベント

30

令和7年度「観月祭」



内 令和7年度「観月祭」(第15回)を開催いたします。観月祭とは、供物を献じて十五夜の満月を鑑賞する「中秋観月」に由来する行事です。国学院大学では、平成22(2010)年から、毎年10月に斎行されてきました。祭儀は、神前に誠をささげたのち、楽器の音色を楽しむ「管絃」と、神を和めるための「祭祀舞」、彩り豊かな「舞楽」が順に演奏されます。

日 10月18日(土)16時

場 渋谷キャンパス

料 無料

申 詳細は本学HPまで

問 神道文化学部（☎03・5466・0209）

令和7年度渋谷区民大学講座「蔦重・歌麿とその時代ー浮世絵と出版文化ー」



内 NHK大河ドラマでもおなじみの蔦屋重三郎と、人気の浮世絵師の喜多川歌麿。江戸時代の出版文化、戯作を専門とする文学部日本文学科・中村正明教授と、日本美術史、特に浮世絵を専門とする文学部哲学科・藤澤紫教授が本学のコレクションも紹介しながらお話しします。

日 10月18日(土)14時～15時30分

場 渋谷キャンパス

料 無料

申 専用フォームから申し込み

問 エクステンションセンター（☎03・5466・0270、✉jigy@kokugakuin.ac.jp）



第10回 地域交流スポーツフェスティバル



内 日ごろ気になる健康指標、楽しみながら測定してみ

対 本学の学部生、大学院生
申 9月24日(木)12時までにエントリー（氏名〔複数名の場合は代表者氏名〕、学部・学科、連絡先、提言のテーマを下記アドレスへメールで送信）

問 企画課（☎03・5466・0395、✉kikaku@kokugakuin.ac.jp）

災害で被害に遭われた皆さまへ



内 7月からのカムチャツカ半島付近の地震に伴う津波や全国各地の大雨などによる災害をはじめ、災害救助法が適用された地域に主たる家計支持者が居住し、家計の急変で今後の学業生活に支障をきたすおそれのある学生は、保証人（父母等）と相談のうえ下記の大学各窓口までご相談ください。適用対象地域は本学HPや内閣府防災HPでご確認ください。

問 ▶ 学生生活課（☎03・5466・0145）

▶ たまプラーザ事務課（☎045・904・7714）

▶ 大学院事務課（☎03・5466・0142）

ませんか？ 本イベントでは体力測定、骨密度測定、体組成測定などを無償で体験することができるほか、体験する機会の少ないスポーツや未就学児対象のキッズコーナーなど、体を動かすコーナーも充実しています。お子様からご高齢の方まで幅広い年代の方に楽しみながら「見える健康」を提供します。

日 10月19日(日)10～15時

場 たまプラーザキャンパス

対 年齢不問

料 無料

申 専用フォームから申し込み

問 人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンター（kchpc@kokugakuin.ac.jp）



第16回 共育フェスティバル



内 地域の子どもたちに学び、遊び、体験を通じて楽しんでもらう共育フェスティバルを開催します。絵本の読み語りやスポーツチャレンジ、コンサート、工作ワークショップなど15企画でお待ちしております。詳細や参加にあたっての注意事項は大学HP（**二次元コード**）でご確認ください。

日 10月26日(日)10～15時

場 たまプラーザキャンパス

料 無料

申 当日受け付け

問 たまプラーザ事務課（☎045・904・7700）



特別講座「渋谷学」戦前・戦後の渋谷の政治・行政と経済



内 平成14（2002）年以来、国学院大学が継続している「渋谷学」の研究成果を、今回は「戦前・戦後の渋谷の政治・行政と経済」というテーマでお届けします。本講座では、戦前期渋谷の住宅地形成、軍隊と渋谷、戦後渋谷区の特設区政と経済の実態、といった硬派な視点から渋谷に迫っていきます。

日 10月15日(水)、22日(水)、29日(水)、11月12日(水)12時

キャリアサポート



※詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡから行ってください

1～3年生対象合同企業セミナー

内 各業界のリーディングカンパニーの採用担当者が来校し、業界や企業の説明をします。毎年多くの先輩がこのイベントをきっかけに、さまざまな企業を知り内定獲得まで進んでいます。この機会に志望する企業や業界への理解を深めましょう。

日 10月8日(水)、22日(水)、29日(水)ほか

対 1～3年生、博前1年次

博物館



料 無料
時 10～18時（最終入館17時30分）
 祝日を除く月曜休館

※博物館関連イベントの問い合わせは

☎03・5466・0359

または博物館HP（二次元コード）



企画展「中世日本の神々ー物語・姿・秘説ー」

内 宗教や信仰、文化が出会うとき、崇敬対象となる〈聖なる存在〉は変容していきます。本展示では本学が所蔵する資料から、さまざまな思想・信仰・宗教と関わり合いながら変貌していく神々の様子を見ていきます。

日 10月4日(土)～11月30日(日)

場 博物館企画展示室 他

50分～14時20分

場 渋谷キャンパス

料 全4回受講で8,800円。

申 専用フォームから申し込み

問 エクステンションセンター（☎03・5466・0270、✉jigy@kokugakuin.ac.jp）



令和7年度ホームカミングデー 在学生／院友 オリジナル企画・同窓会募集



内 11月30日開催のホームカミングデーでご披露いただける演奏・演舞・漫談・活動発表等のオリジナル企画を募集しています。また、部活やサークルのOB・OG会、ゼミ等の同窓会や仲の良いご友人との再会に渋谷キャンパスの教室をご利用いただけます。参加を希望される場合は、**二次元コード**よりお申し込みください。応募が多数の場合は抽選となりますので、ご了承ください。

日 11月30日(日)

場 渋谷キャンパス

申 専用フォームから申し込み（10月15日〔水〕までにお申し込み）

問 校友課（☎03・5466・0787、✉hcd@kokugakuin.ac.jp）



証明書発行サービスを変更

学生および院友（本学卒業生）の利便性向上を目的として、9月1日より、学内のみであった証明書自動発行機から全国のコンビニエンスストアで発行できるサービスへ移行します。これにより、証明書や申請書類の一部が、新たに自宅や帰省先から取得できるようになります。また新サービスではオンライン決済（クレジットカード、キャリア決済、Pay払い、交通系電子マネー）、コンビニエンスストア店頭での現金支払い（Smart Pit経由）が選択できるようになります。ぜひご活用ください（詳細は右記**二次元コード**参照）。



コンビニエンスストアでの発行可能な主な証明書	
卒業証明書（和文・英文とも）	在学証明書（和文）
NEW 【専攻科・別科、法科大学院】修了証明書	NEW 【大学院修了生】在学期間証明書
NEW 【大学院在学生】修了見込証明書	卒業見込証明書（和文・英文とも）
成績証明書（和文）	NEW 各種資格課程単位修得（見込）証明書
NEW 【専攻科・別科、法科大学院】成績証明書（和文）	NEW 教職免許状授与見込証明書
GPA成績証明書（和文）	健康診断証明書

在学生および平成13年3月以降の卒業生のみ、証明書自動発行機またはコンビニエンスストアで発行可能（要利用者登録）

上記以前の卒業生の証明書発行方法や、その他証明書の詳細は大学HPで公開（**二次元コード**）

問 ▶ 教務課・証明書担当（☎03・5466・0137）

▶ たまプラーザ事務課（☎045・904・7714）

▶ 学生生活課（☎03・5466・0145）

▶ 大学院事務課（☎03・5466・0142）

迷いながら、楽しみながら、 観月祭に広報として 携わる日々

大竹莉子さん(日文4)

幼い頃から読書とカメラが大好きだった大竹莉子さん(日文4)。若木睦での活動がきっかけで、観月祭にも広報として携わるようになる。どのように神事と向き合い活動してきたのか、これまでの歩みをうかがった。

幼い頃から読書とカメラが大好きだったという大竹さん。大学入学後のサークル見学の際に、神輿サークル若木睦の存在を知る。

「元々日本文化に興味があり、国学院大学ならではの活動だと感じて参加しました。初めての御神輿は、本当に楽しくて！ 神事の静けさに始まり、御神輿を担いで宮入りする時の熱気、そして還御の静寂……。雰囲気の変化に引かれました」。

若木睦の広報担当の先輩に誘われたことをきっかけに広報活動を手伝うようになり、各地の祭礼で活動の様子を撮影。大竹さんの写真は若木睦の記録写真としてホームページなどに使われるようになった。また、若木睦は観月祭の斎庭係として裏方の仕事を担当しており、記録係として観月祭の写真撮影を任されることになった。観月祭は神道文化学部の学生が中心になって運営されている神事で、他学部である大竹さんは、知らないことが多く戸惑いがあったそうだ。

「記録係といわれても、何を撮るべきか、どこまで撮っているのか線引きがわからず、タイミングや立ち位置も毎回迷いがあり、先輩たちに聞きながらの活動で難しかったです。そもそも神事を撮影してよいものかという葛藤もありました。一方で、記録を残すことの重要性も痛感しました。1年生の年はコロナ禍で中断していた観月祭が復活した年で、皆が手探り状態でした。会場の設営や衣紋の並べ方など、マニュアルとして写真で残しておくことが私の役目なのではないかと思ったのです」。



役割としては責任重大で不安もあったようだが、「記録用の写真だけでなく、さまざまなシーンを撮影できたことが次の年の活動につながっていったのだと思います。もう一度この素晴らしい神事の写真を撮りたいと強く感じたのです。学生たちの集中したまっすぐな表情を捉えることにこだわっていますが、カメラを持っていれば何をしても許されるのではないことを忘れず、いかに謙虚に撮るかということを常に考えています」と語る。

2年生になると、観月祭の記録係は広報として独立した役職となり、大竹さんは活躍が認められ統括を任されることになる。撮影のほか、ポスターやチラシ、葉の制作も仕事だ。4年生の今年は、いかに後輩に引き継ぐかが課題だという。

「観月祭は変わらずに受け継がれていくことが大切で、そのためにも記録写真が必要です。写真もデザインも私は楽しんでできましたし、アートの写真もパンフレットに掲載しましたが、それを絶対としてしまっは継続が難しくなってしまう。また、4年もやってくると、自分の感覚で動いてしまいが

ちですが、やるべきことを整理して伝えられればとも考えています。自分がこだわって積み重ねてきたことを、大きな枠で一度捉え直して、次の世代に伝えなくてはと思っています」

文学部での専攻は伝承文学で、一歩引いた立場から客観的に見る視点が観月祭の広報にも通じると感じている。「運営の中心メンバーで一番の核にいますが、一番外側で見ている人間でいたいし、見る必要があると考えています。外からの視点というのが広報なのかなと思います」と語る。

悩みながら、考えながら、そして楽しみながら広報を続けてきた大竹さん。いまでは、「広報は大竹さんに声を掛ければなんとかしてもらえる」と頼りにされ、「撮影現場に必ずいる」存在になった。「これまでの活動が居場所をつくった」としみじみと語る。好きなことにひたむきに取り組んできた大竹さんの「本当にまわりの人たちに恵まれてきた」との言葉には、感謝の思いがあふれる。そんな充実した学生生活の経験は、これからの日々豊かさをもたらしてくれるはずだ。

インタビューの詳細は「国学院大学メディア」で公開予定

どこもかしこも灰だらけサノエ サノエ 廃墟の中にくつきりと立つた姿に泣けてくる ああ國學は亡びず サノエ サノエ サノエ サノエ サノエ

今年、戦後80年の節目の年です。これは、歌人・釈道空こと、国学院大学元教授の折口信夫先生が、本学から見渡した戦後の荒廃した大学周辺の姿に涙し、また、その一方で、国学院大学の学生を鼓舞する意図で詠ったであろう「国大音頭」の歌詞の冒頭部です。

「泣けてくる」とありますが、私自身がこの句を読むたびに、当時の折口信夫先生の心境を思うと涙してしまいます。

明治15(1882)年に創設された国学院大学は、本年度143年を迎える歴史を持つだけでなく、戦前は、早稲田大学、慶応義塾大学に並んで「文系私立3大学」の一つでした。すなわち、国学院大学は、我が国の歴史と深くかかわる位置にある大学の一つでした。

この歴史的視点に立つとき、「国学院大学で学ぶ」とは、どういうことなのか、改めて考えてもらいたいと思います。

「前略」汝が千人いくさと起たは學問はここに廃れむ。汝らの千人の一人ひとりだに生きてしあらば、國學はやがて興らむ。(中略)國學の学徒は強し。いでさらば、今は訣れむ。」



名誉教授 新富 康央

しんとみ・やすひさ
学校法人国学院大学特別参事。
人間開発学部初代学部長、専門
は教育社会学、人間発達学。新
しい時代の子育て論には定評。

国学の学徒は強し

のあり様とそれに向けた自己認識」という視点で、本学の「学び」を振り返ってほしいと願います。国学院大学は日本の「国」の「かたち」のあり様を追究する大学です。

最後に、国学院大学学徒出陣壮行会で代読された折口信夫先生の「学問の道」の一節を挙げておきます。当時の世相からは、壇上に抗議に上がる学生が出ると思われましたが、国学院大生たちは静かに涙をこらえて聴き入っていたそうです。

「前略」汝が千人いくさと起たは學問はここに廃れむ。汝らの千人の一人ひとりだに生きてしあらば、國學はやがて興らむ。(中略)國學の学徒は強し。いでさらば、今は訣れむ。」



近くて遠い？ 遠くて近い？ そんな親の気持ちや子どもの気持ちを一緒に考えませんか？ 新富名誉教授による子育てエッセーを隔月でお届けしています。感想や新富名誉教授への質問、講演依頼などございましたら広報課までお寄せください。

陸上競技部

上原選手 ワールドユニバーシティゲームズ 3位入賞
日本代表団体 優勝

学生アスリートの頂点を決するFISUワールドユニバーシティゲームズが、ドイツのライン・ルールで開催された。

男子ハーフマラソンは7月26日に行われ、本学陸上競技部の上原琉翔選手（健体4）が出場し、3位に入賞。銅メダルを獲得した。レースは序盤から日本代表選手が主導権を握り、先頭集団をけん引する展開に。上原選手は1時間2分39秒という好タイムでフィニッシュし、優勝選手にわずか10秒差まで迫る力走を見せた。これは日本人学生として歴代4位の記録で、世界の舞台で

堂々たる成績を収めた。

日本勢が1位、3位、4位に入賞し上位を占めた結果、各国の上位3人の合計タイムで競う団体戦では、日本代表が2大会ぶりに金メダルを獲得した。

本大会は個人・団体の両面で好成績を収め、日本の長距離界のレベルの高さを示すものとなり、上原選手の今後の飛躍が期待される。なお、上原選手を中心とする本学の長距離チームは、これから駅伝シーズンを迎える。今回の経験と実績を糧に、駅伝でもさらなる活躍が期待されている。



表彰台上立つ上原選手（中央）©月刊陸上競技

卓球部

第94回全日本大学総合卓球選手権大会
卓球部女子が全国7位入賞、男子はベスト16

第94回全日本大学総合卓球選手権大会（団体の部）が、7月3日から6日にかけて四日市市総合体育館（三重県四日市市）で開催され、全国から男女各48校が大学卓球の頂点を争った。本学卓球部からも男女が出場し、全国の舞台上で力強いプレーを見せた。

同部女子は、泉田和抄選手（経4）、加藤瑞穂選手（法4）、加賀美恵奈選手（神文4）、渡辺佑奈選手（日文3）、高橋美悠選手（観まち3）、上田紫乃選手（日文2）、増田華選手（観まち2）、佐藤野々華選手（初教1）らが3日と4日に行われた予選リーグを全勝で突破。5

日の決勝トーナメント1回戦では芦屋大学に3-1で勝利し、続く2回戦では中京大学との接戦を3-2で制して準々決勝へ進出した。準々決勝では関東の強豪中央大学と対戦し、1-3で惜敗したが、全国7位入賞を成し遂げた。

一方、男子チームも予選リーグを全勝で通過した。決勝トーナメント1回戦では京都産業大学に3-1で勝利したが、2回戦で対戦した早稲田大学に0-3で敗れ、ベスト16入りという結果だった。

男女ともに存在感を示す大会となり、今後のさらなる飛躍に期待がかかる。



7位入賞後の女子選手たち

ソフトテニス部

東日本大会 男子Aチームが団体3位、
飯田選手が個人3位の快挙

第75回東日本大学対抗ソフトテニス競技大会が、7月4日から6日にかけてサニーテニスコート（千葉県白子町）などで開催され、本学ソフトテニス部男子Aチームが団体第3位の成績を収めた。

男子団体戦には全125チームが出場。本学からは、須田零生選手（法4）・金井亮太選手（観まち4）、飯田航仁選手（観まち3）・吉村拓海選手（法2）、岩崎俊介選手（健体4）・大和昌生選手（神文3）の3ペアがAチームとして出場した。

1回戦で国土館大学B、2回戦で東京大学B、3回戦で日本体育大学Eに勝利し、順調に勝ち進んだ。4回戦では早稲田大学Aに3勝1敗で

勝利。準々決勝では中央大学Aとの接戦を3勝2敗で制し、準決勝へと駒を進めた。

準決勝では法政大学Aを相手に、先に2セットを奪う展開となったが、粘る相手に2セットを取り返されて同点に。勝敗をかけた第5ゲームは最後まで接戦となるも、惜しくも敗れ2勝3敗で決勝進出はならなかった。激戦を繰り広げた本学男子Aチームは、総合第3位となった。

さらに、7月8日と9日には、同会場にて第68回東日本学生ソフトテニスシングルス選手権大会が開催され、300人を超える選手が出場する中、飯田選手が強豪選手を次々と破り、見事第3位に輝いた。



3位となった男子選手たち（同部提供）